立石寺と熊野大社の役割

しくみ

- ■ 立石寺如法堂（奥の院）28.23km － 浮嶋稲荷神社 － 熊野大社（南陽市）28.23km
- ■ 立石寺中性院　28.23km － 浮嶋稲荷神社 － 熊野大社（南陽市）28.23km
- ■ 立石寺記念殿　28.23km － 浮嶋稲荷神社 － 熊野大社（南陽市）28.23km
- ■ 立石寺五大堂　28.23km － 浮嶋稲荷神社 － 熊野大社（南陽市）28.23km
- ■ 立石寺神楽岩　28.23km － 浮嶋稲荷神社 － 熊野大社（南陽市）28.23km

立石寺

当山は宝珠山立石寺といい通称『山寺』と呼ばれています。天台宗に属し、創建は貞観二年(860 年)天台座主第 3 世慈覚大師円仁によって建立されました。

当時、この地を訪れた慈覚大師は土地の主より砂金千両・麻布三千反をもって周囲十里四方を買い上げ寺領とし、堂塔三百余をもってこの地の布教に勤められました。開山の際には本山延暦寺より伝教大師が灯された不滅の法灯を分けられ、また開祖慈覚大師の霊位に捧げるために香を絶やさず、大師が当山に伝えた四年を一区切りとした不断の写経行を護る寺院となりました。その後鎌倉期に至り、僧坊大いに栄えましたが、室町期には戦火に巻き込まれ衰えた時期もありましたが、江戸期に千四百二十石の朱印地を賜り、堂塔が再建整備されました。元禄二年(1689)には俳聖松尾芭蕉が奥の細道の紀行の際この地を訪れ、「閑さや 岩にしみ入る 蝉の声」の名句を残しました。　（立石寺ホームページより抜粋）

山形市山寺４４５６－３

聖徳太子、膳美郎女を第一后とした。政難を逃れて三男の麻呂子と親戚の蜂子は丸子婆に連れられ山形へと避難する。後に山寺と呼ばれる。

慈覚大師円仁、先祖清和天皇の命によって、山寺で法要。後に立石寺と号す。立石寺住職、丸子の先祖（麻呂子親王の裔孫）にて、慈覚大師を開山として祭る。立石寺歴代の丸子の住職は山内中性院にて祭られる。中性院がいわゆる山寺としての開山堂にあたる。

明治初年、大日本帝国は廃仏毀釈を慣行。平等寺はことごとく大神神社暴徒に破壊された。神仏習合の三輪明神は廃仏毀釈によって潰えた。

仏毀釈後平等寺址に河内より曹洞宗の翠松庵が移築されていた。翠松庵住職黒宮秋正師、聖徳太子の縁を求めて山形市七浦丸子家を訪れる。丸子忠男、これに応じ奈良へと向かう。丸子孝法、慶田寺方丈と黒宮方丈の篤志によって駒澤大学にて仏教を学ぶ。大倭日高見国奥州藤原清衡の子孫千田幸子と結婚。

翠松庵にて１６年の托鉢勧進行。全国１０万軒の家々の寄進によって、1977 年（昭和 52)、曹洞宗の寺院、「三輪山平等寺」として再興した。　　（奈良県 三輪山平等寺歴史縁起由緒概要より抜粋）

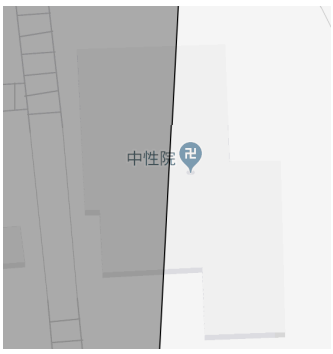
https://ameblo.jp/hirohito33/entry-11874707845.html

立石寺如法堂

奥之院は通称で、正しくは「如法堂」といいます。慈覚大師が中国で持ち歩いていたとされる釈迦如来と多宝如来の両尊を御本尊とする如法堂は、参道の終点にあるので「奥之院」と呼ばれています。

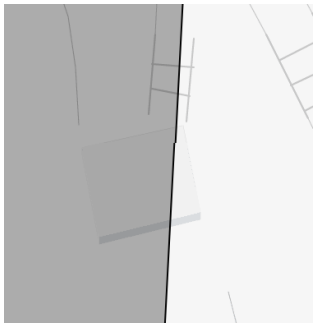
立石寺中性院

阿弥陀如来を本尊とし、明治元年に不動院と合併されました。背後の岩窟には新庄藩戸沢家歴代の石碑が立ち、また道の向かい側には、山形城主最上義光公霊屋があり、最上一族の霊を本尊となる一寸一社の地蔵尊によって祀っています。



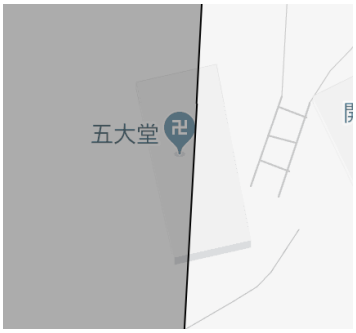
立石寺記念殿

明治 41 年 9 月。当時東宮（皇太子）であった大正天皇が山寺に行啓（参詣）された時にご休息なされた建物。



立石寺五大堂

開山 30 年後に建立された五大明王を祀る道場。断崖に突き出すようお堂が立ち山寺を一望。



立石寺神楽岩

下山口にある巨岩。

浮嶋稲荷神社

祭神は「宇迦之御魂命」「天熊之大人神（合祀神）」。神池の大沼には大小の葦の島が風や流れに関係なく浮遊し、江戸時代には国の数 32 あり、その動きで吉凶を占っていたとされる。沼は白竜湖とも呼ばれ弁財天が祀られている。大円寺『朝日嶽縁起』（1505 年）によると、朝日岳の麓に御手洗の「大富沼」があると記されている。

白鳳 9 年（681）役の小角（役の証覚・役の行者）が弟子の覚道を連れて出羽路に来た折、大谷川（朝日町大谷）のほとりで梵字が記された板碑が流れくるのを見つけ、川をさかのぼり、60 余りの島が浮遊する神池大沼を見つけた。湖畔に浮島稲荷大明神を祀り、弟子覚道を別当（大行院）とし朝日岳修験が行なわれた。大行院最上家（宮司）系図の脇書に 730 年に「**大沼社**を南西の丘に移す」記述がある。建久 4 年（1193）には寒河江荘地頭となった大江広元の進言により源頼朝の祈願所になり、その後も大江家、徳川家、最上家にも祈願所として崇敬された。国指定名勝。

※参考「朝日町史」等

山形県西村山郡朝日町大沼

備考

浮島は、現在は数も減り、岸に付き動かないことが多いが、動く時は流れや風に関係なく意志があるかのように動き回り驚く。役の小角は梵字が書かれた板碑が流れてきたのを見つけたのだから、すでに大沼は異教徒の浮島信仰の地だったはず。稲荷神社の神池とされるが、元々「大富沼」が大沼なら出雲系「富一族」の祀る沼だったのだろう。大朝日岳にも大富観音が祀られていた。元々弁財天（瀬織津姫）や龍神（自然霊）の神池に稲荷神が祀られたのだと考えられる。あるいは、730 年に「大沼社を南西の丘に移す」記述があるが、その時に稲荷社にすり替えられたのかもしれない。いずれにせよ、古いしくみはほとんどが稲荷神社ではなく大沼の鳥居の立つ「出島」（写真）が起点となっている。弁財天を祭神とする大沼浮島社（仮称）はここにあったはず。全国に散らばる浮島神社の総本宮ではないか。そして、多くの神社の神池に浮島のごとく島が作られ弁財天や市杵島姫が祀られているのも本来は分社もしくは見立てなのではないだろうか。池に囲まれた古墳すらも浮島に見えてくる。古代史を探る時、きっと浮島信仰は重要な鍵になると思われる。

熊野大社（南陽市宮内）

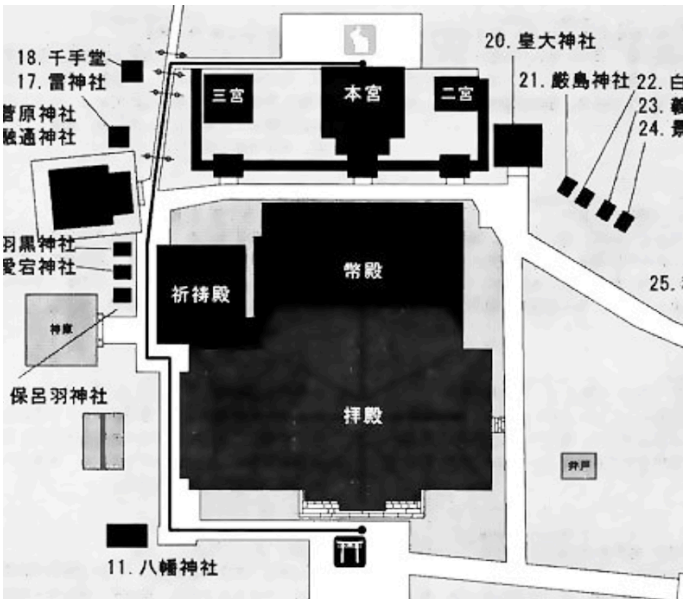
熊野大社は、大同元年（806 年）、平城天皇の勅命により再建されたと伝えられています。その後も時の天皇、法皇の恩恵をうけ、のちに天台宗・真言宗・羽黒修験・神道の四派も加わり、熊野修験の霊場としても栄えました。熊野三山・軽井沢の熊野皇大神社とともに「日本三熊野」の一つ。祭神/熊野夫須美大神　(伊弉冉尊)熊野速玉大神　(伊弉諾尊)　熊野家津御子大神（素盞嗚尊）

（熊野大社ホームページより）

嘗ては、熊野大社證誠殿の場所に阿弥陀如来をお祭りした證誠寺があり、この地の中心的存在であったようです。出羽國置賜郡宮内村、熊野三社大権現・熊野山證誠寺は、人王五十一代平城天皇の御宇大同元年再建再建。清和天皇御宇 貞観年中慈覚大師（円仁）當國御下向の節當山ニ御参詣、中興の祖となる。

（狛犬見聞録ホームページより）

山形県南陽市宮内３４７６−１



備考

立石寺は、聖徳太子の三男の丸子氏の子孫が開いていたものを円仁が買い受けたと考えられる。日本三大熊野といわれる南陽市宮内の熊野大社も、大同元年（806 年）、平城天皇の勅命により再建されたと伝えられるから、それ以前から信仰の地だったことがうかがえる。浮嶋稲荷神社のある神池「大沼」の古いしくみ（祭祀線）は浮嶋稲荷神社ではなく鳥居の立つ出島に集中している。

蝦夷の大切な自然聖地「大沼の浮島」を、異なる神の浮嶋稲荷神社を置いて封印している。浮嶋稲荷神社より 28.23km の周円上に立石寺奥の院の如法堂、本来の開山堂とされる中性院、大正天皇の記念殿、五大明王の五大堂、そして封印石の神楽岩と連なる。浮嶋稲荷神社に集まった気を引くためのしくみであり、浮嶋稲荷神社の封印の力を強くするために、立石寺と同距離の場所に熊野大社を再建し脇侍の役割にするしくみとも考えられる。なにより、熊野大社にも円仁は訪れ中興の祖となっている。ちなみに朝日町の豊龍神社は円仁の弟子安慧（あんえ）が建立している。豊龍神社は平安京大極殿から大沼浮島との距離 536.79km とぴったり同距離の場所に作られ、大沼の気を送り込むしくみと考えられる。詳細→「平安京を護る朝日町の神々」

「閑さや岩にしみ入る蝉の声」の芭蕉の句は立石寺で詠んだ。サイト「光輝く地球はそこに」の岩本氏によると、芭蕉は全国を行脚して光の地を封印する闇の役割を担っていた人らしい。大沼封じのしくみをより強固にするために立石寺を参詣したのだろうか。大沼浮島に芭蕉は来ていないが、当時の宮司により芭蕉塚が湖畔に建てられている。芭蕉の念をキャッチするためのものかもしれない。

別頁「興福寺と浮嶋稲荷神社」も参考にご覧ください。

コンパス機能付きマップで確認できる

風や流れに関わらず動く島

大沼湖畔にある案内板